真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06（6702）1980
FAX 06（6700）1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

教祖百四十年祭

子供たちをおぢばへ連れて帰ろう

子供の笑顔が溢れる「こどもおぢばがえり」が４年ぶりに開催される

「この屋敷は、人間はじめ出した屋敷やで。生まれ故郷や。どんな病でも救からんことはない。早速に息子を連れておいで。おまえの来るのを、今日か明日かと待ってたのやで。」

『稿本天理教教祖伝逸話篇』三三「国の掛け橋」

教祖はたすけを求めておやしきへ帰ってきた人たちに、いつも「待っていた、待っていた。」と、可愛い我が子がはるばると帰って来たのを迎える、優しい温かなお言葉を下さいました。

この教祖の親心にお応えしようと、私たちは一人でも多くの方を教祖のもとへとお連れするため、日々にをいがけ、おたすけ、丹精を積み重ねています。

親里では今年、4年ぶりに「こどもおぢばがえり」が開催されますが、おぢばに子供を連れて帰ると、教祖が子供たち一人ひとりの魂に印を付けてくださいます。印を付けてもらった子供は、大人になって人生を左右するような大きな悩み、苦しみを抱えたとき、ふと「子供の頃、こどもおぢばがえりに行って楽しかったなあ」と思い出す。それがきっかけとなって教会に足を運び、たすけていただいたという例もあります。教祖のもとに子供を連れて帰ることは、将来に繋（つな）がる素晴らしいおたすけです。この夏、たとえ少ない人数でも、たとえ我が子や孫だけでも、子供を連れておぢばに帰り、教祖にお喜びいただきましょう。

四方正面

世界中を混乱に巻き込んだコロナ問題から3年、日本は第5類への移行とともに元の生活へと戻ってきた感があるが、未だマスクを手放すことができずにいる人が多いと聞く。理由は人それぞれだが、中には「習慣になってしまった」という人もいるようだ。

ある専門家は「一定の事を2カ月間続けると、それは習慣になる」と言っていた。それならばすべてを元に戻すのではなく、コロナ禍で人を思いやるために行ってきたさまざまな行動は、これからも続けていくことが大切である。

年祭活動に入り、新たな信仰実践に動き出した今、人を思いやるための行動を地道にコツコツと積み重ね、御存命の教祖にお喜びいただけるよう励みたい。

にち〳〵にすむしわかりし　むねのうち　せゑぢんしたいみへてくるぞや　六号 15

（加）

《5月月次祭　挨拶》

たすけ一条のための苦心は決して無駄にはならない

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、たすけ一条に誠心誠意ご丹精くださいまして、誠にありがとうございます。先程、神殿講話にて世話人・島村先生より、種々お話を聞かせていただきました。しっかりと心に治めて、お互いの心をぢば一条に正して、教祖百四十年祭を目指して成人の足取りを勇んで進めたいと思います。

さて、芦津大教会の神殿は昭和45年４月16日の月次祭に起工式を挙行し、その３年後の昭和48年５月20日、つまり今からちょうど50年前に神殿建築落成奉告祭を執り行い、それから芦津は50年の時を刻んできました。

思えば父が会長に就任した昭和33年に、当時の大きな事情から西区新町の教会の土地建物を売却し、全てを本部にお供えして、阿倍野にあった芦浪分教会を間借りする形で仮移転をしました。教祖のどん底の御苦労を心の支えに、先輩方はあえて苦労の道を歩んでくださり、初代の道を改めて歩み直してくださったのです。そして、その５年後に現在の伏せ込み棟を神殿としてこの地に移転して、その10年後にこの神殿が竣工したのです。

この普請は奥村組が設計と監督をしましたが、実際の工事は信者さんのひのきしんで行いました。ようぼくが経営している業者や職人さんをはじめ、大勢の信者さんが連日ひのきしんをしてくださり、３年間で延べ約７万人の方々が真実の汗を伏せ込んでくださいました。もちろん身をもって伏せ込めなかった方々も、各地から真実の心を寄せてくださいました。こうして芦津に繋がる大勢の方々の一手一つの真実が結集して、この神殿は竣工したのです。

ところで、これだけの大きな普請をするためには足場を設営する必要があります。普通はリースをするのですが、これだけ大きな建物ですから量が多いし期間も長く、莫大な費用が掛かるため、買い取ることにしたのです。しかし、建物ができると、足場は無用の長物になってしまいます。長い間使っていたので傷みも激しく、大量にあるので、どうしたものかと悩んでいたようです。結果として、必要なところに使ってもらうことができたとは聞いていますが、これは見方を変えれば無駄に思えてしまいます。

しかし、これがなければ普請ができなかったわけですから、決して無駄ではありません。要は、それ相当のものを作るには、それ相応の無駄と思えるものが必要になるのです。

教祖は、直接数万人の方をおたすけになりましたが、その後信仰の道に付かれたのはほんの一握りの方々だけで、大半の人たちは道から離れていきました。これも見方を変えれば、教祖は壮絶な無駄をされたように感じますが、逆にこうした理に適う無駄を積み重ねることによって、正味が残る、本物が現れるということを、教祖はひながたの道を通して教えてくださっているように思うのです。

おたすけと丹精を例にとってみましても、遠方の信者さんに

もっと成人をしてもらいたいと、電話やメール、手紙で何度も修養科を勧めるが、よい返事がない。そこで時間を使い、遠方まで足を運んだけれども、結局は断られてしまった。こうしたことはよくあります。これに費やした労力は一見無駄に見えますが、決して無駄ではありません。

また、命の危ない方のおたすけにかかるとき、連日十二下りのお願いづとめをし、断食もし、水ごりも打つ。おぢばへお願いに歩いて帰る。そして毎日おたすけに通ったけれども、結局は出直されてしまった。ここに致した骨折りは決して無駄にはならないのです。こうした理に適う無駄を重ねることで、正味の御守護を頂けることを教祖は教えてくださるのです。空振りのおたすけ、空振りの丹精がいかに大切かということを心に留めなければならないと思います。

教祖はひながたの道を通して、物事を合理的に考え、すぐに結果を求めたがる私たちに、たすけ一条の道のために苦心をし、骨を折ること、努力することを促してくださっているに違いないと思います。この教祖の御心を、しっかりと汲み取らせていただきたいのです。

芦津の先人方は、道のために苦心に苦心を重ね、努力の上に努力をし、喜びと勇み心で一手一つにつとめてくださいました。そのおかげで今の道があります。

今の時旬は教祖のひながたを目標に、仕切って成人の道を歩む旬です。先人への感謝を忘れることなく、教祖に心嬉しくお受け取りいただけるように、労を惜しまず、心勇んで時旬の歩みを進めさせていただきたいと存じます。

今日の月次祭、大変ご苦労様でございました。（要約）

立教百八十六年　五月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、一れつの子供可愛い一条の親心から、親心溢れるお導きを賜り、真にたすかる道へとお連れ通り下さいます御慈愛の程は、誠に有難き極みでございます。私共は、親神様の尽きせぬ御守護に日々（ひび）御礼申し上げ、御恩報じに勤しみ励ませて頂いておりますが、今日の吉日は、おぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今よりお役にあずかる者一同、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、大教会五月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参り集う芦津の道の子達が、御厚恩に御礼申し上げ、人々のたすかりと世の治まりを共に願い奉る誠の心をお受け取り下さいまして、遍く御恵みをお垂れ下さいますよう御願い申し上げます。

今日の月次祭には世話人・島村廣義先生のご巡教を頂いて、おぢば直々のご講話をお聞かせ頂きますが、これを成人の糧として、心をぢば一条に正して、時旬の歩みに一層励ませて頂きたいと存じます。

さて、各地でコロナ禍の規制緩和が進む中、信仰活動が元に復しつつあることは大変嬉しい次第であります。私共をはじめ芦津に繋（つな）がる教会長、ようぼく一同は、諭達にこもる道の親のお心をしっかりと汲み取らせて頂いて、日々に理を尽くし、ぢばへ心を繋ぎ、教会へ足を運び、身上や事情に悩み苦しむ人の御守護を願っておたすけと丹精に努め励んで、心勇んで信仰実践に動き働かせて頂く所存でございます。

何卒この心根をお受け取り下さいまして、自由自在の理にお導き頂き、たすけ一条の御守護と喜びに満ちた年祭活動を勤めさせて頂きまして、陽気ぐらしへの歩みを着実に進ませて頂けますようお連れ通りの程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《5月月次祭　神殿講話》

「どうでも人をたすけたい」という熱い心で時旬を通ろう

世話人　島村廣義先生

たすけ一条のお手本

教祖は旬刻限の到来とともに月日のやしろとお定まりくださって、世界一れつをたすけるために、陽気ぐらしへのたすけ一条の道をお創めくださいました。以来、50年にわたって親神様の思召をお説きくだされ、よろづたすけのつとめをお教えくだされ、ひながたの道をお示しくださいました。そして、明治20年陰暦正月26日、定命を縮めて現身をお隠しになり、子供の更なる成人を急き込みくださいました。

教祖が定命を25年縮めてまでも現身を隠されたのは、子供をたすけ上げたい親心からです。お姿は見えませんが、今も存命のまま元のやしきにお留まりくだされて、世界一れつをたすけるために、先頭に立ってお働きくだされているのです。この教祖の親心にお応えし、仕切って成人の歩みを進める、これが教祖年祭を勤めさせていただく意義です。

「諭達第四号」に教祖のひながたの道について簡潔に述べていただいております。そもそも親神様が人間世界をお創りになったその思いは、「陽気ぐらしをする姿を見て親神様も楽しみたい」という思召からであります。

おふでさきに、

月日にわにんけんはじめかけたのわ
よふきゆさんがみたいゆへから
十四号　25
せかいにハこのしんぢつをしらんから
みなどこまでもいつむはかりで
十四号　26

とありますが、私たち人間は、誰も彼も皆一様にこの親神様の御神意、真実を知らずに勝手な道を通り、気ままに過ごすので、それぞれがほこりを積んで、陽気ぐらしとは相反する様子を見せていただくようになるわけです。親神様が人間をお創りくだされたとき、私たちに心の自由を与えてくださったわけですが、それぞれが親神様の思召に沿わない心遣いの結果、争いごとの絶えない世の中に立ち至っている。

親神様は全知全能、何でもすべて可能なお立場ですが、あえて人間に心の自由をお許しになり、人間が自ら求めて陽気ぐらしをする、その姿を見て楽しもうと思いつかれたのです。

親神様は約束の年限を待ちかねて、教祖を月日のやしろとお定めになって、この世にお現われになり、よろづいさいをお明かしくださいました。

教祖の50年のひながたは、一れつをたすけるために、陽気ぐらしへのたすけ一条の道をお教えくださったひながたです。人間創造の守護の理をつとめに表して、このおつとめを以て世の中を陽気ぐらしの世に立て替えるとお教えくだされ、50年かけてたすけ一条の道、つとめの完成を進められたのです。

その道すがらを「ひながた」と呼んでお慕いするのは、それが単に一個人の生涯の物語ではなく、道の子すべてがその御足跡を手本として辿らせてもらうもの、実践すべきもの、ということです。教祖のひながたは、世界一れつをたすけるための、たすけ一条の通り方のお手本です。

神一条の心定め

ひながたを以て教えられたことは、たすけ一条の道としておつとめの勤修と、おつとめの理によってこの世を陽気ぐらしの世界に立て替えることです。

教祖がおつとめをお教えくだされたことについては、並々ならぬ御苦労と御苦心をもってお導きく

だされています。やしきの掃除から始まって、ほこりの心を拭い去ること。地位や名誉、物事の価値観など人間思案ではなく、すべて神一条の上から屋敷をきれいに掃除なさった上で、一人ひとりいんねんを見定めてつとめの人衆を引き寄せられ、お仕込みくださり、道具を整えられるとともに、元なるぢばをお定めくださって、順序を追ってつとめの完成へとお導きくださったのです。

このつとめの勤修をお急き込みくださる最後のお仕込みが、明治20年1月1日より始まる、親神様と初代真柱様を芯に当時の先生方と交わされた49日間のお言葉のやり取りに凝縮されていると仰せいただくのです。真柱様はそのことをこのようにお話しくださっています。

「明治20年1月1日から2月18日、すなわち陰暦正月26日までの49日間、あたかも立教以来49年間のひながたの道を凝縮したかのようなお仕込みをくださった後、命捨てもとの固い心定めの下、教え通りにおつとめを勤めた人々の神一条の精神をお受け取りになって、教祖は現身をお隠しになりました。いわばこのときのお仕込みは、立教の元一日以来、這えば立て、立てば歩めの親心一筋にお導きくださった教祖がおつとめ実行を台に、我が身思案、人間思案を去って、神一条に立ち切る陽気ぐらしへの道、自立をお促しになったのであります。その画竜点睛のお仕込みであったといえましょう」。

陽気ぐらしの世に立て替えるためのおつとめをお教えくださったが、そのためにはあらゆる人間思案を断ち切って、神一条でつとめきることが何よりも大切だということです。子供可愛い故の親心、世界一れつを早くたすけ上げたい一念の親心から、現身を隠され、存命の理を以てお働きくださっているのです。この親心に応えることが、教祖年祭を勤める意義です。

教祖は、たすけを乞い願って初めておぢばに帰ってこられた方々に、

「欲を離れなさいよ。」

『稿本天理教教祖伝逸話篇』

一〇〇「人を救けるのやで」

「なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。」

同四二「人を救けたら」

「人救けたら我が身救かる」

同一六七「人救けたら」

と仰せられ、おたすけいただいた方々には、恩返しの道として、

「救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。」

同七二「救かる身やもの」

と仰せられているのです。そして、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

同一〇〇「人を救けるのやで」

と、にをいがけ・おたすけをすることをお教えになりました。

教祖は身上・事情に印を付けて人々をお引き寄せになり、初めておぢばに帰られた方々にも、にをいがけ・おたすけをすることをお促しになり、たすけ一条の御用にお使いくださるのです。

ここにおいでの皆様は、私も含めて、親やご先祖がおたすけいただいて、結構にこの道を通らせていただいているという方が大方で、おさづけの理を頂戴したようぼくが大半だと思います。道の理を聞き分け、たすけ一条の御用の一端を担わせていただく立場のお互いです。ようぼくである私たちに、教祖はどれだけ「しっかりと立ち働いてや」と御期待くださっているのかと思わずにはおれません。

世上から見て成程あれでこそと言う心をめん〳〵持ってすれば、日々に皆んな受け取る。案じる事は一つも無い。速やか鮮やか思うように治まる。思うように成るで。世上から見ては、あれでこそ成程の人や、成程の者やなあという心を持って、神一条の道を運ぶなら、何彼の処鮮やかと守護しよう。

明治23年5月6日

とおさしづにありますが、ようぼくという立場の上から「なるほどなあ」と人様から言ってもらい、

また親神様からも「一生懸命頑張ってくれているなあ」と思っていただけるように、お教え通りにおつとめを勤め、人々のたすかり、世の治まりを真剣に願い、この教えを世界に伝え広めるにをいがけ・おたすけをさせていただくことだと思うのです。「にをいがけ・おたすけは苦手だ」という人も多いと思いますが、

どんな所にをい掛かるも神が働くから掛かる。なか〳〵の働き言うまでやない。出るや否や危なき怖わき所でも守護するで通れる。何処其処へにをい掛かりたというは皆神の守護、どんな所通りて危なき所怖わき所でもなか〳〵の理無くば通られやせん。遁れて来た所、一寸遁れる事出来やせん。仇の中、敵の中剣の中も連れて通るも同じ事と言う。

明治26年7月12日

と仰せくださいます。私たちがおたすけをしているのではなくて、親神様が働いてくださるから、にをいがかかるのです。

心を定めて通る

私は会長を譲りましたが、教会長現職のときに、「布教の家」に入寮した若者を激励に行きました。

あるときの年祭活動中の話です。誰でもそうだと思うのですが、全く今まで縁のなかった初めての地で、最初は皆意気に燃え一生懸命勇んで戸別訪問に回っても話は聞いてもらえないし、来るなと怒鳴られたりして、1カ月もすると頭打ちするのです。

その青年も、誰一人として話を聞いてもらえない。どうしたら神様のお話を聞いてもらえるのか、と真剣に悩み考えた末、「自分に聞いてもらえるだけの理がない、徳がない。それなら話を聞いてもらえる理づくりとして、毎日の食事を1食神様にお供えさせていただこう」と心定めをしました。布教の家の食事は、朝はパンの耳と味噌汁、昼は抜きで、晩はお与えいただいた物が1日の食事です。その青年は晩ごはんをお供えして、パンの耳と味噌汁の1食だけで頑張っていたのです。

1カ月後、同僚や布教の家の主任先生が大変気を遣ってくださって、前日の晩ごはんを朝ごはんに回してくださり、それを頂けるようになりました。そんな中、8月になって初めて神様のお話を聞いてくださる方が与わりました。5月から始めて、3カ月かかりました。それからは別席者もお与えいただき、入院している病人さんの所へもおたすけに行かせていただけるようになりましたが、まだ1日1食を続けていたので、布教の家の主任先生から「身体を壊すから期限を切りなさい」と仰っていただき、それから3カ月間、結果として10月までの半年間、1日1食で頑張りました。

この懸命な姿、真実をお受け取りくださったのでしょう。毎月別席を運んでくださる方を2名御守護いただき、おたすけに通っていた入院患者が転院されても、本人から「来てくれ」と電話がかかってきて、今まで通りおたすけに通えました。そして、5、6人の別席者を頂いておぢば帰りをさせていただくことができるようになりました。

1人の青年が「どうしたら神様にお働きいただけるか」を思案し、心を定めて真剣に通る中、鮮やかな御守護を頂戴し、日々勇み切って通っている姿に、私は大変刺激を受けました。

信用してもらえる努力を

またある教会長子弟は、間もなく寮生活を終える2月に、最後の激励に行ったのですが、まだ1人も別席者をお与えいただいていなかった。「布教の家を卒寮したら、大教会で青年勤めをさせてもらえますか」と言うので、「別席者を御守護いただくまでは帰ってくるな」と言ったのです。本人はすぐ自分の親に連絡して、「別席者を御守護いただくまでは帰ってくるなと言われたから、アパートを探さないといけないので、お金を送ってくれ」という話をしたようです。ところが親は、「まだ1カ月あるから、一生懸命頑張って御守護いた

だくようにやれ」とハッパをかけたそうです。するとその3日後に本人から電話がかかってきました。「にをいはかかっていたけれど、踏ん切りがつかない人に、3日間通い詰めて別席をお誘いしたら、行ってくれることになりました」ということでした。

私は彼のおぢば帰りの日程を聞いていなかったのですが、私が別席のお取り次ぎに出させていただくと、その部屋の一番前に2人が並んで座っていました。私もびっくりしたけど、本人も本当に勇んで、今は教会長ですが、そのときのことを未だにいろいろと話してくれます。

私は布教の家の寮生に、布教地でどういうふうに回っているかを尋ねます。「自分でその日に思い浮かんだ所を回っている」と言うと、「それはだめや」と言います。「この人に話して、本当にたすけてくれるだろうか」と、信用できる人物かどうかを確かめた上でないと、自分の身の上話はできない。だから、回る地域をちゃんと決めて、繰り返し同じ所を回ることが大切だと伝えます。そして地域の方々に喜んでもらえるよう、ひのきしんやお声掛けをするなりして、まずは信用してもらえる努力をしないと、人は話してくれない。

見ず知らずのところで布教に回るには、自分という人間をいかに信用してもらうか。話を聞かせてもらえるように、自分がいかに心を治めて通るかが一番大切だと思うのです。

ある教会長子弟に、「戸別訪問で、話を聞きますと言われたら、どうする？」と聞いたら、困った顔をするのです。教祖は、「自分のたすけてもらったことを話しなさい」と仰せになるので、その子に「自分が実際にたすけていただいた話があるのか。自分の家の信仰の元一日をちゃんと知っているか」と聞いたところ、親から聞いていない。すぐ電話して親に聞くように言いました。たすけてもらった元一日の話をベースにして、かしもの・かりものの話から始めるのが筋道です。

何でもどうでもの心

昔も今も神様のお働きには変わりはない。親神様にお働きいただけるだけの理づくりを、どれだけしているかを考えなければならないと思います。

例えば、今は交通の便も良くなって、おぢばから高知まで車なら4時間半で着きます。昔のことを思うと、少しでも長くおぢばにいて、親神様、教祖のお膝元でしっかりと伏せ込んで理づくりをさせていただくことができるはずです。親神様にお働きいただく真実の伏せ込み、真実のつくし運びをさせていただけるようになっているのですが、今は日帰りできるので、祭典ぎりぎりにおぢばに着いて、祭典が終わったらすぐに帰るという方が多くなってしまった。「長いこと教祖のお膝元にいて、何か一つでも自分のできるご用をして、理づくりをして帰ろう」ということが少なくなりました。

尽した理は将来の理に治まる。どんな大きいものでも、たゞ心だけではどうもならん。道のため尽し果たした理は、難儀不自由という理は無い。

明治31年10月31日

と仰せいただきます。たすけ一条の道として「つとめとさづけ」をお教えいただいていますが、おたすけ人の「どうでもこうでもたすかってもらいたい。たすけさせていただきたい」という真実の心が一番大切です。

桝井伊三郎先生のお話がよく引き合いに出されますが、教祖は、

「救からんものを、なんでもと言うて、子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実な

ら神が受け取る。」

『稿本天理教教祖伝逸話篇』

一六「子供が親のために」

と仰せいただきます。「なんでも、どうでも」という、やむにやまれぬ心がなければ、おたすけはできません。

教祖百二十年祭活動のときの話です。部内教会長の孫、14歳の女の子ですが、「こどもおぢばがえり」の少年ひのきしん隊本部練成会に参加することを楽しみにしていました。ところが直前に劇症肝炎を発症して倒れてしまい、このままの状態が続いたら2週間もたないと医師から宣告されました。祖母である会長は、自分の娘であるこの子の母親と「親神様にお縋りするしかたすけていただく道はない」と理立ての心を定め、一心におさづけを取り次ぎ、御守護を願いました。娘の嫁ぎ先の舅さん姑さんは全く信仰のない方でしたが、2人には別席を運ぶ心を定めてもらいました。

しかし、なかなか病状は好転せず、生体肝移植をすれば、何とかたすかる見込みがあるとのことで手術を決断し、母親が肝臓を提供することになりました。お医者さんからは「手術が成功しても激しい運動はできない。肝臓を提供したお母さんも、軽い事務程度の仕事しかできなくなる」と言われたそうです。

その翌日、会長は、どうでもたすかってもらいたいとの一心で、2人の手術代を理立てとしてお供えする心を定めました。当時、約2千500万かかるとのことでした。娘の舅さん、姑さんは学校の先生をしていて退職したばかりだったので、会長は母親に、「手術代の半分は私がつくってお供えする。舅さん、姑さんとあなたも皆心を定めて、もう半分をつくりなさい」と言って、退職金もすべて預かって帰ってきて、すぐにお供えされました。

そして会長は、信者宅の講社祭の後に、食事もとらずに100軒以上の家をにをいがけに回られました。一息ついたところで、病院の母親から電話が入って、「娘の肝臓が動き出した！」と言うのです。完全に駄目だと思っていた肝臓が働き出し、手術は見合わせることになりました。

その後、病状は一進一退を繰り返しましたが、信仰のなかった家に神実様をお祀りし、舅、姑さんは別席を運ばれ、母親は翌年、修養科を修了されました。この頃からその子も快方に向かって、6月にすっきり御守護頂いて退院し、こどもおぢばがえりに元気におぢばに帰らせてもらって、親神様、教祖にお礼を申し上げました。

会長である祖母の「どうでも孫娘をたすける」という信仰信念、そして「娘をたすけていただけるのなら、自分の肝臓を提供する」と、命がけで子供をたすけようとされた母親の真実。この「どうでもこうでもたすけさせていただきたい」という真心、一生懸命親神様につくし、運ばれたこの真実、それをお受け取りくださって鮮やかな御守護を頂けたのだと思います。教祖の年祭という旬の理を戴いて、すべて出し切り、尽くし切り、運び切られたその結果に頂戴された姿です。

私たちは、神様にお働きいただく理を、日々どれだけ勤め切っているか。例えば、教会への日参、日々の理をいかに神様に繋いで運んでいるか、ということに尽きると思います。毎日、朝夕におつとめをして、親神様にお願いし、お礼申し上げ、真実をしっかりと神様に繋いで通ることが、おたすけに繋がる元になります。

みかぐらうたの奇跡

ある教会長ですが、脳内出血を起こして緊急手術をし、命は取り留めたけれど、運動神経と言葉を司る部位を損傷しており、寝たきりになる可能性が高いと言われました。

手術後、何とか意識が回復するように、本人に声をかけるのですが、身体がピクリともしません。医者が「本人が元気なときによく話していた言葉や歌をそばで聞かせたら、刺激になって意識が回復するかもしれない」と言うので、

前真柱様がお歌いになるみかぐらうたを枕元で聞かせたのです。すると、声は出ないし、身体は動かないけれど、微かに唇が動いたのです。

それからだんだんと御守護いただいて、見事に回復し、右半身は不自由ですが、自分で杖なしで歩けるようになり、また身障者用の特別な自動車を運転して、信者さんを乗せておぢばへ帰らせてもらえるまでに回復しました。

もちろん毎日お願いづとめを勤め、おさづけも取り次いでいましたが、本人の意識がない中でみかぐらうたを聞かせて、それがきっかけになって意識が覚醒しました。

教祖が50年かかってお教えくださったたすけ一条のおつとめの理と、25年の定命と引き換えにお渡しくだされるようになったおさづけの理。教祖からお教えいただくたすけ一条の道は、親神様の素晴らしいお働きを見せていただけることを確信しました。皆が一生懸命たすけ一条の御用につとめ、その成果を教祖にお供えさせていただきたいと思います。

共に歩くことが丹精

諭達に、

「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通り、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」

とお述べいただきます。今私たちが恩恵を受けているのは、親やご先祖が一生懸命勤めてくれた理、お徳を頂いて御用を勤めている。だから、私たち自身が一生懸命勤めて、子や孫へその理を引き継いでいくことが大切だと、改めて思います。

昭和初期、南礼拝場や教祖殿の普請のとき、私の祖父が御用材調達の御用を仰せつかって、一生懸命献木の御用をしました。その山に二代真柱様がご視察いただいたことがありましたが、教祖百年祭前の東西礼拝場普請のとき、私も二代真柱様が歩かれた同じ道を歩いたのです。すると、御用材を搬出した切り株がちゃんと残っているのです。そして植林した山ではなく、原生林ですから、そこに種が落ちて若い木が育っている。素晴らしいと思いました。

昭和初期に山から切り出しておぢばへ運んだ同じ場所から、百年祭にも木を切り出しておぢばへ運ばせていただいた。原生林という大自然の育みの中で檜が種を落とし、若い芽が育って、次の世代の用材として引き継ぐ姿を見て、この信仰の伝承もかくあるべきだと思います。

芦津大教会は、教祖百四十年祭の活動の一つとして「人をたすけ、人を育てる（おたすけと丹精）」とお打ち出しされていますが、丹精について前真柱様は、「一生懸命人を育てていく上で、心遣いをして教え導く、そういうふうに育てるということと思うかもしらんけど、そうじゃない。共に歩くことや。一緒に歩かんとあかん、言うてるだけではいかん」とよく仰せになりました。教え導くという意味ではなく、共に歩かせてもらう立場でやらせてもらうということだと思います。

「親が一生懸命通っていたら、子供は何もしなくても育つ」のではなく、育てる努力が大切だと思います。

心定めの完遂を

心定めて、成っても成らいでも、身上はどうなってもというは、これ神の真実。

明治34年1月27日

というおさしづがあります。

ただ定めただけではなく、これは神様との約束で、それぞれがやり遂げることが心定めです。結果として表れてくるのは、自分たちのやったこと、活動を進めていく上での励みですから、心定めをやり切る。これをお願いして、今日のお話を終えたいと思います。

（文責　編集部）

青年会芦津分会総会開催

5月28日、青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は大教会で総会を開催。青年会員104名が参加した。

はじめに、14交替でのおつとめ。女鳴物は女子青年、女子会の協力を頂き、一手一つに勤めた。

その後の式典では、初めに井筒文夫役員が祝辞。挑戦することの大切さを説いた上で、「若者が年祭活動を牽引するんだ、という心意気をもって、より良い影響を与える青年会活動を展開してほしい」と、若者に対する期待を述べた。

続いて井筒委員長が挨拶に立ち、「芦津分会は9月にひのきしん隊に入隊する。おぢばへの伏せ込みに力を入れて取り組みたい。また、今年のご本部の総会は11月25日に開催されることになった。土曜日開催なので、一人でも多くの方にご参加いただきたい」と今後の活動について会員に語りかけた。

その後、あらきとうりよう指針唱和、青年会歌を斉唱。

式典第2部では、2人1組になって対話を行った。「信仰していて良かったこと、モヤモヤしたこと」「日常であなたが一番積みやすいほこりの心遣い」などをテーマに、普段話せないことを語り合い、会員同士の繋がりを深めた。

会員からは「話したことのない人と話すことで、大教会に行く楽しみが増えた」などの感想が聞かれた。

その後、食堂で直会。女子青年も合流し、ビンゴ大会を中心としたプログラムで、和気あいあいと楽しい時間を過ごした。

「対話」では会員同士が繋がりを深め合った

五月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長		
扉者	守田清一	座りづとめ	大教会長　奥田正徳　瀧本眞二郎　会長夫人　前会長夫人　奥田富美子
扉者	加世田洋		
指図方	今川政治	前半	川畑澄博　梶川和隆　立花善三　吉田幸子　松森明美　山埜こずえ
賛者	石川健郎	後半	樋川泰士　河合善洋　花岡忠和　山田秀子　浜田千代実　木村理恵
賛者	湯川正信		
献饌長	岩切正教	伝供	竹内義忠　山田道弘　岩切正義　立花善文　葭内浩　木村真次　中村俊和　樋川泰士　岡本久昭　河合善洋　新居里実　西本興正　村田光伸　吉田裕樹　川畑正博　榎康紀　瀧本亘　梶川和人　宗我道明　北島久嗣　橋爪徹弥　今川保　金原明　久米義彦

地方	湯川正圀　井筒敏成　山田道弘	笛	山本義範　岡島秀男　井筒文夫
ちゃんぽん	岩切正義　吉田裕和　河端芳雄	拍子木	木村真次　浜田宣郎　葭内浩
太鼓	奥田正儀　村田光伸　梶川芳征	すりがね	瀧本庄司　中村俊和　西本義之
小鼓	瀧本一太郎　梶川芳男　西本興正　今川聖一　我道明　望月慶太	琴	瀧本基志枝
三味線	花岡由紀子　加世田陽子　奥田千晶	胡弓	浜田たつゑ　岡島きよの

喜びの奉告祭

四代会長就任奉告祭

和阪分教会

津和部属・和阪分教会（兵庫県尼崎市）は5月21日、大教会長をお迎えして、好光教雄四代会長就任奉告祭を執り行った。参拝者は45名。

和阪の道は、昭和15年に水畑ハナ初代会長のもと設立された。昭和37年、二代会長・好光昌夫の就任に合わせ、現在の地に移転した。

午前11時、好光会長が祭文を奏上。

続いて挨拶に立たれた大教会長は、「教会活動はこの教会にいんねんあって繋がった方方がそれぞれの徳分を活かして作り上げていくもの。新しい会長を芯に、一手一つに陽気ぐらしの手本となるような和やかな雰囲気の教会になるようお通りいただきたい」と望まれた。

おつとめを勤めた後、好光会長は、「教祖百四十年祭に向けて、たすけ一条、御恩報じの道をしっかり歩ませていただきます」と力強く決意を述べた。

その後、会食をしながら、くじ引き大会、くす玉割りと和やかな時間を過ごした。

最後に前会長夫妻に花束を贈呈。49年間の労をねぎらい、万歳三唱で幕を閉じた。

四代会長就任奉告祭

照南分教会

姶良部属・照南分教会（鹿児島市）は6月4日、大教会長をお迎えして、瀬戸山眞美四代会長就任奉告祭を執り行った。参拝者は34名。

記念撮影後、午前10時30分、会長が祭文奏上。続いて大教会長が挨拶。新会長に対して「親神様の御守護をありがたいと感じて、御恩報じの心を養い、成人の道を歩んでほしい」「教会に来た時に、また行きたいという雰囲気を作って、陽気ぐらしを感じられる教会になってほしい」と諭された。

参拝者に対しては、「この教会にいんねんあって繋がる皆さんが、陽気ぐらしの手本、理想の教会に近づけるよう、新しい会長を芯に一手一つに勤めていただきたい」と、先人たちのたすけ一条の後を誇りを持って続くよう、激励された。

陽気におつとめを勤めた後、瀬戸山会長が挨拶。「温かい心で人を導き育てながら、御恩報じの道をしっかりと次の世代に繋げられるよう、精いっぱい勤めさせていただきます」と決意を述べた。

その後の祝宴では、終始和やかな雰囲気で過ごした。

女子青年の集い開催

芦津女子青年（北村はぎ乃委員長）は5月28日、大教会で「女子青年の集い」を開催、40名が参加した。

10時から青年会総会のおつとめに参加。14交替で女鳴物を勤めた。

記念撮影の後、陽気ホールで式典。婦人会長本部からのメッセージを拝聴した後、北村委員長が挨拶。「一人ではできなくても、みんなとならできる。女子青年活動を通して、楽しみながら、『女子青年活動のかどめ』を実行しましょう」と抱負を述べた。

続いて竹内裕美さん（稗島委員部）が新入会員宣言を行い、加世田奈津子副委員長の感話で式典を終了した。

青年会と合同での直会では、ダンスを披露し、賑やかで楽しいひと時を過ごした。

事情はこび

立教186年５月26日お許し
二名分教会
任命

五代会長
奥（おく）　良美（よしみ）　59歳

昭和58年おさづけの理拝戴、59年天理看護学院卒業、62年修養科第555期修了、63年教会長資格検定講習会前期修了、平成４年教人登録、令和４年教会長資格検定講習会修了、検定合格。長年、看護師として勤めている。

就任奉告祭　７月９日

教務部報

教人登録

濵本　大徳（島原港）
立教186年４月24日

辻本　英子（西　浜）
南方　美香（西　浜）
南方　郁香（西　浜）
南方　紀香（西　浜）
立教186年５月９日

修養科第981期修了

松永美代子（大関門）
中野　昭子（山城谷）
井澤由美子（芦　南）
立教186年５月27日

おさづけの理拝戴《４月》

川原喜美代（東　津）

初席《４月》

〈２名〉芦眞勇
〈１名〉島原、西浜、毛見、芦浪、真明彰化、本氣
〈順序運びより　８名〉

学生生徒修養会
高校の部

8/11（金）▶▶▶ 8/15（火）

○定員　700名（男女350名）
○内容　講話、グループワーク、レクリエーション
○受講御供　10,000円　　**○申込期間**　5/25～7/25
○申込方法　受講願書と返信用封筒（保護者氏名、住所、郵便番号を記入し、84円切手を貼付）を学生担当委員会（詰所・木村、奥田）までご提出ください。
※受講願書は詰所・大教会事務所にあります

月例統計（自令和５年１月１日～至令和５年４月30日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	のお理さ拝づ戴け	修養科修了	教人
大教会（1）	9	8		
靱（13）	1			
東津（23）		1		
吉野川（29）	1			
島原（16）	3	2		1
日方（15）	2			
稗島（7）	3			
本津（2）				
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）	1			
門司（6）		2		2
當別（6）				
大島（26）	8			
沖縄（3）	1			
尼崎（2）				
四ツ山（5）				
大冠（2）				
島下（1）	1			
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）	1			
甲邊（1）		1		
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）				
紀周（3）	1			
勝明（1）				
神の島（1）	1			
兵庫眞洲（1）				
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）	2			
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1	1		
神滝本（1）				
芦明徳（1）		1		
真明彰化（2）	1			1
本氣（2）	1			
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	38	16	0	4